

第17回南のシナリオ大賞

優秀賞

株式会社ホワイト

立石えり子

「株式会社ホワイト」あらすじ

ハラスメント防止が徹底されている株式会社ホワイト。課長の愛子は部下の業務も肩代わりし夜中まで残業するなど疲弊していた。

そこへ見回りに来た老警備員が「ワシは死んだ祖父ちゃんの鬼平だ。助けに来た」と言い出し愛子の体に相乗りしてしまう。

翌朝から愛子の発言は相乗りする鬼平による昭和の鬼上司の本音がさく裂。愛子の豹変に部下たちは戸惑う。そんな中、福岡の愛子の母が倒れた。が、部下たちは愛子が母の元に行くことに難色を示し、業を煮やした愛子は「会社を辞める」と言い残して母の元へ。鬼平は今度は部下の澤村の体に相乗りする。

一方、病院で容態が落ち着いた愛子の母は「頑張りすぎてはいけない」と愛子を諭す。

愛子が職場に復帰すると職場は団結して仕事を進めていた。新入社員の西田も成長したいので今後は厳しく指導して欲しいと言う。

安心したのか鬼平は天国に帰っていく。

SE 激しくキーボードを叩く音。
SE ガラガラつとドアが開いて。

鬼平「電気ばついとくって思ったら課長さんか」
愛子「ああ、警備員さん、すいません」

鬼平「毎晩、こげん遅いと体壊しますよ？」
愛子「ええ。でも、もう渋谷行き、終電出ち

やっただんであと少しだけやっていきます」

鬼平「課長一人で抱えすぎですって。たまには部下にガツンと言ってやらせなさいよ」
愛子「(笑って) ダメですよ。うちの会社、ハ

ラスメント防止が徹底されてるんですから」
鬼平「それじゃ、課長……(ごそごそして)

これ。タクシーで渋谷まで帰りんしゃい」
愛子「えつ、1万円？ 警備員さんが私に？」

鬼平「ワシから愛子にお小遣いたい」
愛子「いえタクシー代くらい自分で……って

何でお小遣い？ 何で私の名前知ってるの？」
鬼平「そりや、愛子って名前ばつけたんはワ

登場人物

愛子 (39) 営業第2課長

鬼平 (75) 警備員／愛子の祖父 (故人)

西田 (23) 営業第2課新入社員

澤村 (28) 営業第2課主任

ゆり (32) 営業第2課社員／子育て中

洋子 (67) 愛子の母

医師

シヤけん」

愛子「はあああ？？」

鬼平「愛子、わからんか？ 祖父ちゃんたい」

愛子「じ、祖父ちゃん？？」

鬼平「そうや、死んだ博多の祖父ちゃんばい」

愛子「博多の祖父ちゃんつて、まさか、昔、

福岡県警で『雷の鬼平』つて恐れられてた

つていう？ あの鬼警部だった？」

鬼平「……ハハハ、照れるばい！」

愛子「照れるばいつて。何、お祖父ちゃん、

警備員さんに乗り移っちゃったの？」

鬼平「やけん、そう言うとするやろうが」

愛子「そんな……そんなバカなこと……」

鬼平「あんな。ワシ、愛子さんことあん世から

眺めとつたんや。けどもう見てられんぞな」

愛子「見てられん？？」

鬼平「何ね、この会社は！ 管理職の愛子ば

……つかり部下にへ〜こら気いば遣うせて」

愛子「いいんだつて。私、独身だし、私が頑

張つてみんなが幸せになるんなら、それで」

鬼平「ようなか！ 愛子がよくてもワシが許し

ゃん！ ワシの大事な……（涙ぐみ）大事な

愛子ばこげん目に遭わせよつて」

SE ドーンと机を叩いて

鬼平「このバカちんがつ！！」

愛子「お祖父ちゃん、机、壊れる！」

鬼平「こうなつたら、ワシに任しえろ！」

愛子「任しえろつて、どうするつていうの？」

鬼平「こうするつたい！」

愛子「えつ、えつ？ 何、お祖父ちゃん、何

したの？ や、やだ（キヤハハと笑い）や

めて！ やだつたら、くすぐつたいつて」

鬼平「（天の声つぽく。以下『鬼平』同じ）も

う大丈夫や。お前ん体に相乗りしたけんな」

SE 早朝の小鳥の声。

愛子「んっんん。あれ？ 私、職場で寝ちゃ

た？」

つたんだ……ああ〜 変な夢見たあ」

SE ガラガラつとドアが開く。

澤村「課長、おはようございまあ〜す」

愛子「どしたの、澤村さん。こんなに朝早く」

澤村「実は課長にお話が……今週末結婚記念

日なんで金曜日、有休取りまあ〜す」

※以下、「★★」はドスの効いた低音で。

「☆☆」は通常モードで。

愛子「☆☆もしかして奥様と旅行？ いいわね

金曜はぜひ休んで★★よかわけねえやろ！」

愛子・澤村「（同時に）☆☆えつ？？？」

澤村「課長、どうしたんですか？ 疲れてま

す？」

愛子「★★決まつとろうが！ 仕事残して定時

に帰るお前んせいで疲れとるんばい！」

澤村「課長、何で博多弁？ 何か乗り移つ

た？」

愛子「★★ハハハ、凶星たい、相乗りばい！

よかか？有休ってんなな、いつちよ前に仕事やつとーやつが取るもんたい。お前は百年早か！ ☆☆ってお祖父ちゃんそれ違うー！

澤村「あ、あの有休は働く人の権利ですよ
ね？」

愛子「☆☆そうよね、そのとおり ★★んわけなか！顔ば洗うて出直して来んしゃい！」

澤村「課長。俺、コンプラ部に直訴します！」

SE ガラガラつとドアが開き閉まる

愛子「☆☆どうしょ。私、懲戒処分になる」

SE 机上の電話が鳴る。

愛子「☆☆はい、株式会社ホワイトです」

ゆり「（電話で。以下同じ）課長 柴田です。
今度は下の子が熱を出してしまいました」

愛子「☆☆まあ大変！じゃ柴田さんの仕事は

私がやつとく……★★わけなかるが！」
ゆり「はあ？電話、よく聞こえないんですが」
愛子「★★まゝつたく、お前んちん子供、今月何回、熱ば出しゃあ気が済むつたい！！

☆☆つて、お祖父ちゃん！ それ今、日本で一番言つちやいけないセリフだつてば！

ゆり「課長？ 異次元の子育て支援なんです
よね？ 当然、休んでいいですよね？」

愛子「☆☆そ、そ、そうよ！ 大丈夫、仕事は全部私が代わりに……★★じゃなくさつ

きん澤村つて、有休男にやらしえろつて」
ゆり「あの、課長？ ちゃんと聞いてます？」

愛子「★★お前ん方こそ耳の穴かっぼじつて聞きんしゃい。よかか？まずお前が抱えよ

る仕事ば全て洗い出して周りん同僚に伝えれ。いつ子供が熱ば出しても引き継げるこ

としておくんが働くもんの常識たい！」

SE 電話が切れる音。

愛子「☆☆あ、電話切れた……」

西田「……（恐る恐る）あ、あの……」
愛子「☆☆わあ、ビックリした！ 西田君、いつから、そこにいたの??」

西田「課長が怒鳴つてたんで、ビックリして」
愛子「☆☆あ、あ、ごめん。で、何、どした？」

西田「お得意様との契約書間違えちゃつて。でも僕、入社してまだ半年です。課長がち

ゃんと教えてくんないからこんなことに」
愛子「☆☆そつか、じゃあ、もう一度教える

……★★わけなかるが、このばかちんが！」
西田「えつ?? 課長、今なんて？」

愛子「★★よかか！ここは学校やなかと。こ
んだけ手取り足取り教えてもろうといて何

ば言いよ！いいかげん、給料分ぐらいは働
けつて ☆☆そんなこと言つて。お祖父ち

ゃん、最近の若い人は繊細なんだつてば」
西田「課長、一人突つ込み？ 二重人格??」

愛子「★★お前はとつと仕事始めんかい！」
西田「僕、親にも怒られたことないのに」

愛子「★★よかたい、じゃ今夜二人で飲み行くか？　じっくり差しつ差されつばい！」

西田「課長と二人で？　それセクハラですー！」

愛子「あ、西田君！　ちよつと待って！」

SE　ガラガラとドアが開き閉まる。

愛子「☆☆お祖父ちゃん、今、部下を飲みに誘うとハラスメントになるんだってば」

鬼平「はあ？　令和ちゆうんはそげなおかしな時代になつとーとか」

SE　机上の電話が鳴る。

愛子「☆☆あ、はい、部下と行き違いが……」

SE　電話を切る音。

愛子「☆☆もお、お祖父ちゃん、私、コン

プラ部から注意受けちゃったじゃない」

鬼平「なんやそのコンなんちゆうやつが大威張りでのさばつとう会社は今に滅びるやろ」

SE　机上の電話が鳴る。

愛子「☆☆ですからハラスメントはもう二度と……　え？　あ、はい、仏川は私ですが、ええ、洋子は私の母で……ええーっ？？」

鬼平「どした愛子！　洋子がどげんかしたか？」

愛子「☆☆（鬼平に）お母さんが倒れたって……はい、博多病院……はい、わかります」

SE　電話を切る音。

鬼平「愛子、よかけん直ぐ博多行きんしゃい！　洋子にはお前しかおらんばい！　早う！！」

愛子「☆☆でも、私がお母さんのところ行つちやったら、これだけの仕事を誰が……」

SE　ガラガラと扉が開いて。

澤村「課長！　俺たち決めました。課長が何と言つても俺たちは定時には帰ります！」

西田「の、飲み会なんか誘わないで下さい」

ゆり「これ以上少子化が進んだら、独身の課長の将来は誰が看ると思つてんですか？」

愛子「☆☆……聞いてみんな。福岡にいる母が倒れて私、すぐ行かないとダメなの。仕事、みんなで協力して進めてもらえない？」

ゆり「はああ？　ムチャ言わないで下さい。私には子供が2人もいるんですよ？？」

愛子「☆☆わかつてる。でも、お願い、母は今、一人暮らしで家族は私しかないの」

澤村「行つてもいいですけど、管理職としての責任果たしてからにして下さいよね！」

愛子「☆☆そんな、そんな言い方……」

澤村「どんなに言われても、俺たち、今以上の仕事はやりませんから」

愛子「☆☆……わかつたわ」

ゆり「……何がわかったんです?」

愛子「☆☆じゃあ、私、辞めます、会社!」

澤村・ゆり・西田・鬼平「ええーっ!」

愛子「☆☆こんな、こんなに頑張つて働いても、病気の母親の元にも行かれないんなら

ここにいない意味ない、もう絶対辞めるっ!」

澤村「か、課長??」

愛子「☆☆澤村君、部長に言つといて!退職

願いは福岡から郵送しますって」

澤村「☆☆ええ。ん?なんだ? キャハハ、

くすぐりたい! ★★ああ〜こいつん体、

男ん癖に香水臭か! 愛子、ワシ、澤村っ

ちゆう男に相乗りしたけん早う行け!」

愛子「☆☆えつ、お祖父ちゃんが澤村さん

に??」

澤村「★★(咳払い) あ〜よかか? 今から

主任のワシがこの営業第2課ば仕切るけ

ん」

西田「さ、澤村さん、急にワシとか言つてど

うしたんですか??」

愛子M「☆☆お祖父ちゃん、ありがと!」

SE 飛行機が飛んでいく音。

SE 大きな病院の館内放送などの音。

SE 病室のドアがガラガラと開いて。

愛子「娘の愛子です。あの先生、母の容態

は?」

医師「落ち着きましたよ。もう大丈夫です」

愛子「(涙ぐみ) ありがとございます!」

洋子「……(目覚めて) う、う〜ん」

愛子「お母さん、愛子よ? どこか痛い?」

洋子「愛子か。何や東京から来てくれたんか」

愛子「当たり前でしょ?」

洋子「……長い夢ば見とつた。河原の向こう

でな。死んだ愛子の祖父ちゃんがおつかな

い顔してまた来ちゃいかんって怒つとつた」

愛子「お祖父ちゃんが助けてくれたのね」

洋子「愛子、仕事ん方は大丈夫なんか?」

愛子「大丈夫。もう会社辞めることにした。

こうしてお母さんの手、握つていたいから」

洋子「愛子は仕事は好いとつたやろ。私のお

めにそげん簡単に辞めたらいいけんばい」

愛子「いいのよ。私、もう疲れちゃつたし」

洋子「愛子、頑張り過ぎたんと違うか?」

愛子「え?」

洋子「あんな、愛子。人つていうもんは頑張

り過ぎると知らんうちに『私がこげん頑張

と〜とにいい』いう態度が表に出るもんたい」

愛子「え? そういうもの?」

洋子「本当の優しさつちゆうのはな。相手ん

気持ちと自分の気持ち、お互いよくくわか

り合つたところに生まる〜もんたい」

愛子「じゃあ私、本当は優しくなかつたの?」

洋子「わかつたら早う帰る支度しんしゃい」

SE チュンチュンと早朝の小鳥の声。

SE ガラガラとドアが開く音。

西田「課長！ お母さん、もういいんですか？」

愛子「ああ、西田君、ありがとう。すつかり元気になったわ。この前は……その……」

西田「（小声で）大丈夫です。僕たち、課長が辞めるとか聞かなかつたことにしてるんで」

愛子「えっ？ そうなの？？」

西田「はい。僕らも反省しました。澤村さんに言われて、課長に頼りきりだったなって」

愛子「（呟いて）お祖父ちゃんの作業ね……」（西田に）それで？ 仕事の方は順調？？」

西田「はい。仕事もバツチリ大丈夫ですよ」

愛子「でも西田君、こんなに朝早く来てるの？」

西田「なんか澤村さんが新人は早く来て先輩の机を雑巾がけするもんだって怒鳴るんで」

愛子「ええっ？？ みんな困ってるでしょ？」

西田「つてか、僕、飲み会で皆んなの本音なんか聞けて仕事、やりやすくなってます」

愛子「え？ そういうもん？」

西田「あの課長？ 僕、ホントは今まで不安だったんです。同期はもつと仕事任されたり怒られたりして成長してるみたいなんで」

愛子「そうね。私、西田君の本当の気持ち、ちゃんと聞いてなかったのかも。ごめん」

西田「これからは厳しく指導して下さい」

愛子「私、ブラックになっちゃうかもよ？」

西田「（笑って）望むところですよ！」

SE 雷鳴がとどろく。

西田「あれ、雷？ なんか今、稲光の中に鬼みたいな顔のお爺さんが見えたような」

鬼平「いや、来られるんは1回限りたい」

愛子「そんな〜 もう会えないの？」

鬼平「よう聞け、愛子。愛子ん体ば自分んだけんもんやて思ったらそりや思い上がりや。自分を大事にせなワシの雷は落とすけんな雷が鳴ったらワシやて思いんしゃい！」

愛子「わかつたお祖父ちゃん。私も……（涙ぐみ）私もお祖父ちゃんの幸せ祈ってるよ」

SE 雷鳴がとどろく。

（了）